

秋雲壇

染谷 秀雄

三十三間堂に安置の千手千眼観世音菩薩立像一千一躰すべてが国宝に指定され、他の二十八部衆および風神・雷神像などを含め堂内一千六十二躰尊像すべてが国宝として揃った。これにより本来の安置場所にあるべく形で復元されたことになる。国宝になった事を記念してこの尊像を高い壇から眺めることができるという話を聞き、大いに期待をして出掛けた。この尊像は亡くなった人や知人に会えるとも言われ、夏風先生は「家内がいたよ」と嬉しそうな顔をされ「屋根」に何度か書かれた。夏風先生と京都に行く時は必ず寄った三十三間堂、今回の訪問は逝去以来初めてのことであった。

十一月初旬に訪れた三十三間堂は全国的に穏やかな天候に恵まれて相変わらずの人出、障子もあたらしく貼り替えられ、扉をいつもより大きく開けているせいなのか、やや明る過ぎる堂内となっていた。

菩薩立像の足許には第〇〇號〇〇作創建仏1164年などとどこどこに番号と仏師の名が書かれていた。どこがどう置き方が変わっているのかといつも通りの流れで半分ほど進んだところ、中尊を過ぎたあたりから「秋雲壇」と名付けた高さ一・ニメートル長さ僅か七・八メートルほどの壇が設えてあった。高いところから眺められるというのはこのことかと、やや拍子抜けの感は免れなかったが、ここに上がると景観は最上壇まで見渡せ十六本の灯明の当り加減で尊像がところどころ赤くも見えた。今回は湛慶作の三尊と隆承作、隆円作の二尊が間近く参拝できる稀有の機会と貼り紙がしてあったため、探してみたが湛慶作の三尊は簡単に判ったものの外の二尊は遂に見つけることは出来なかった。どうやら後方仏となっていたようである。この五尊は今まで東京、京都、奈良の国立博物館に寄託されていたので全部集まるのは二十六年ぶりであり。また四十五年間の長期に

わたる保存修理を終え三月に全尊が揃ったことにより新国宝の指定を受けたのを機会に八〇年ぶりに鎌倉時代の版面や学術書にもとづき創建当時に近づけた。しかしながらはつきりわかったのは以前訪れた時と風神・雷神が右と左に入れ替わっていたことであった。